

櫛

岡山大学附属図書館報

OKAYAMA UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN

NO. 12

1990
OCTOBER

図書館資料について

—改善と課題—

定 兼 範 明

1 はじめに

資料収集の二大要件は、資料費の確保と適正な選書である。この改善を目指して昨年度後半に現状の把握と分析を試み、「図書館資料整備5カ年計画」を立案した。幸い運営委員会・評議会でご了承を得たので、これに関連して図書館資料の現状等について簡単に報告したいと思う。

2 資料費について

平成元年度に、図書館に登録された資料の総額は、約35千万円である。このうち主として研究室等に配置される研究用図書を除いた図書館の経常的な資料費は、28,692千円であり、内訳は次の通りである。文部省配賦額25,657千円（学生用図書費22,341、参考図書費383、特別図書費1,962、外国雑誌費971）、学内措置費（関係部局負担）3,035千円。

この中で特に学生用図書費配賦額が昭和56年（30,310千円）以降激減したこと、学生定員の急増、書価の値上がり、また、従来にない新資料が出現したこと等の理由で、図書館資料の整備が大幅に遅れ、学生定員1万名を越える大学の図書館としては甚だ不十分な状態に陥った。これを改善するため、昭和52年以降据え置きとなっていた学内措置費の倍増をお願いし、ご了承頂いた次第である。

3 予算配分について

適切な資料収集には、所蔵資料の現状を踏まえつつ収集目標を明確にし、資料費の計画的な配分を行うことが肝要である。この趣旨により本年度策定した予算配分費目は、一般図書（指定図書を含む）、参考図書、継続雑誌・新聞等、※ニューメディア資料（CD-ROM等）、※AV資料、※外国人留学生用



資料、全学共用図書、特別図書、外国雑誌（自然科学系）であり、更に各費目内を細分して適正な予算配分に努めた。

改定した主な点は、形骸化の見られる指定図書を一般図書に含めて資料費の有効利用を図ったこと、新費目として上記※印を新設し、特に高額化する冊子体参考図書（主として二次資料）に替えて、検索等がより便利なCD-ROMを重視したこと、学内措置費の半額を全学共用図書（高額図書）に配分して倍増し蔵書構成上の欠陥の是正に努め、またその一部を近年教官負担が過重になっている共同利用自然科学系外国雑誌費に当てたこと、全学共用図書を鹿田分館にも配置したこと等である。

4 資料選定について

図書館としては、運営委員会を主体に各種の選定委員会を設けているが、紙幅の都合で省略する。ここでは特に教官選定学生用図書についてお願いしたいと思う。

現在中央館の閲覧室には、約13万冊の学生用図書を配架しているが、学生からは必要な学習図書が不足している等不満の声が屢々聞かれる。資料費の不足もその一因であるが、予算配分や選書にも問題があるように思う。

例えば、大型参考図書の不足は、教官選定学生用図書費（平成2年度総額約1,200万円）が部局内で学科単位等に細分化されるのも一因ではないかと思う。図書館としては、学生希望図書費の増額や館内資料選定委員会の充実を図るとともに、教官選書に必要な情報の積極的な提供に努めたいと思っている。学生の動向に親しい教官の方々に一層のご配慮をお願いする次第である。

5 図書館情報の提供について

図書館情報の提供は、学生用図書の選定のみならず、研究室等に配置されている教官研究用図書の重複購入（最近の購入では8部重

複しているものがある）を避け、研究費の有効利用のためにも必要であろう。

図書館としては、情報の内容とその提供方法について検討した結果、今年度から広報委員会を設け、ニュースレター「ライブラリー・リフレッシュ」を強化して最新情報をお届けしているが、資料選定に必要な情報も一には今後これを通じて提供したいと思っている。例えば、理系の学生は余り図書館を利用しないとの通説があるが、先述の不満も実は理系の学生の方が多い。

ちなみに平成元年9月から1年間の分類別館外貸出冊数（学生）は、次のとおりである。更には学部・学年別等もお知らせする予定である。この他、必要な情報について教官の方々からご指示をいただければ幸甚である。

総記	799	哲学	3,835
歴史	3,141	社会科学	13,700
自然科学	20,315	工学	5,807
産業	1,652	美術	1,811
語学	1,363	文学	7,515

二には、学内LANによる所蔵情報の迅速な提供である。総合情報処理センターの電算機へのOPAC（オンライン利用者目録）の構築は、現在試行中であり、遅くとも11月には各研究室の端末からの検索が可能になる予定である。しかしこれだけでは不十分で、最新収書情報の提供には図書館専用電算機への接続回線を開設する必要があり、接続機構の新設を検討中である。

6 おわりに

この他、学術情報の爆発的増大への対処としてのILL（図書館間相互貸借）や、学術審議会の指摘にもあるが、「諸職交替」に続いて各種データベースを作成、提供すること等、図書館資料に関する課題は山積している。

利用者の方々のご理解と積極的なご支援をお願いする次第である。

（さだかね・のりあき 附属図書館長）



池田家文庫藩政史料(古文書・記録類)の マイクロ化事業について

岩元忠幸

はじめに

本学には、池田家文庫をはじめとして地方史料等の貴重な近世史料が多数収集され、逐次目録として整理し、大切に保存されているが、かねてから、歴代の附属図書館長をはじめ関係者はそれらの保存対策と利用についてなみなみならぬご苦労をされてきた。この度丸善株式会社の協力のもとに「池田家文庫藩政史料のマイクロ化」に着手したので、今回のマイクロ化計画の概要等について紹介し、今後の課題について考えてみたい。

1 池田家文庫について

池田家文庫は、旧岡山藩(31万5,200石)の初代藩主池田光政が寛永9年(1632年)鳥取から岡山へ入封して以来、明治の廃藩置県(1872年)に至るまでの約240年間にわたって累積された藩政史料(古文書・記録類)約6万点と和漢典籍約3万2千点とからなっている。古文書・記録類は、信長・秀吉・家康・秀忠などの印判状や自筆書状などの歴代重書をはじめ、岡山藩の藩政全般、全期にわたる藩政史料(重要文化財「信長記」を含む)であって、わが国の幕藩体制史研究上第一級の史料として知られている。

この池田家収蔵の史料は、明治以降も岡山市内の池田家の倉庫で厳重に保存されてきた。昭和20年6月の岡山空襲の際、岡山城や池田邸は灰燼に帰したが、幸い史料が収蔵されていた倉庫は戦災からまぬがれることができた。これらの貴重な史料は、岡山大学の創立に当たり、昭和25年3月池田宣政氏から本学に譲渡され、「池田家文庫」と呼ばれるようになったものである。

2 整理・利用の状況について

池田家文庫の整理は、本学に移されて間もなく、関係教官を中心に同文庫整理委員会が発足、昭和27～35年に仮目録が刊行された。昭和39年度から4年間にわたり文部省の整理予算の配布を受け、本格的整理作業が進められ、延べ3,712人の人員と3年3カ月の歳月をかけ、43年3月に完了した。44年11月文部省から目録刊行の経費が交付され、直ちに編集・刊行作業に取りかかり、45年3月、『岡山大学所蔵池田家文庫総目録』を刊行することができた。

この『総目録』が国の内外に配布されたことや、全国的な幕藩体制史研究、地方史研究の進展とがあいまって、池田家文庫の利用者は飛躍的に伸び、閲覧・複製による利用は、年間5千点から1万点に達し、平均して古文書7千点、和漢典籍約1千点に及んでいる。利用者は年平均約1,300人、うち学外の大学関係・官公機関・一般市民等の利用は約550人で、ほぼ半数を占めている。

3 マイクロ化事業計画の経緯

このように、池田家文庫史料は、閲覧、複製、出版掲載、展示会出品などをとおして、広く研究者等に公開され、わが国の近世史研究に多大な貢献をしてきた。しかしながら、その一方では、本学はこれらの膨大な史料の保存には大変苦慮してきており、文部省からは年々古文書の収集・整理等のため特別に予算の配賦を受け、その一部を史料の補修などにもあててきたが、なにしろ膨大な量の史料であり、利用者も多いため、利用に伴う史料の劣化などもあって、その保存対策は目下の

急務であった。

一方、丸善株式会社は、同社が創業をはじめてから120年になり、それを記念する同社の文化事業として壮大なマイクロ化事業を計画された。そしてその最初の計画として、国立国会図書館とタイアップして、国会図書館が所蔵する図書のうち、明治期に刊行された図書約16万冊（約12万件）についてマイクロ化を計画し、平成元年9月から具体的にその計画をスタートさせた。この度、丸善株式会社は、本学が所蔵している池田家文庫の学術的価値等に着眼して、そのマイクロ化を本学に申し入れてきた。

池田家文庫は、前述のとおり江戸時代を中心とした大藩の藩政史料が主であるが、三百諸侯のうちでも藩政史料がそっくり残っている例は極めて少なく、中でも池田家文庫は質量ともに最も充実しているものといえる。今回の計画は、それらの史料を一挙にマイクロフィルムに変換しようとするもので、古文書・記録類では初めての大規模な企画である。

4 マイクロ化事業計画の概要

〈目的〉

まず第1に、マイクロフィルムに撮影することによって、重要文化財「信長記」を含む貴重な学術史料が、マイクロフィルムの形態で、将来にわたって永久的に保存できる。

第2に、池田家文庫の利用者の大部分はこのマイクロフィルムを利用するようになり、原史料でなければすまないというような場合にだけ閲覧するようになり、利用によって生じる原史料の損耗を防ぐことができる。

第3に、マイクロフィルムが、数多く複製され、国の内外のいろいろな機関等で所蔵されるようになれば、わざわざ本学まで足を運ばなくても、遠隔の地にありながら、自由に利用できるようになる。

第4に、各地でマイクロフィルムが所蔵されることにより、今迄以上に多くの研究者等

に活用され、近世史研究が一層進展する。

第5に、自動検索仕様の製品として製作されるため、必要な史料を瞬時に画像として見ることができるほか、瞬時に印刷物としてプリントアウトできるようになり、史料検索のスピードアップが図れる。等々。

〈数量〉

今回は池田家文庫のうち、「古文書・記録類」を対象とし、史料としての価値が非常に高いと思われる和漢典籍については一部マイクロ化するものの、絵図類や、大部分の図書についてはマイクロ化できない。絵図（約3千点）は、大きいものが多く、撮影が困難であること、和漢典籍は、池田家文庫のオリジナルではないものも含まれており、経費もかさむため今回の計画では除外されている。今回の計画では、対象になる約6万点を16mmのフィルムで、コマ数にして200万コマ、ロールフィルムで約2,500リールを撮影することになっている。

〈撮影期間・撮影順序〉

史料の保存状況や分野ごとの史料の数量等を勘案して、『池田家文庫総目録』に整理されている分類に従って、次のように4期に分け、平成2年9月から順次撮影を開始して、3カ年の計画で行われる。

- 第1期 総記、国事維新、武将書翰・信長記、法制、行政
- 第2期 領地、藩士、宗教
- 第3期 財政、産業、社会、教育文化、土木建築、交通通信、軍事、その他
- 第4期 藩侯

〈撮影場所〉

池田家文庫は、貴重史料のため従来から附属図書館内で閲覧等を認めてきたこと、マイクロ化の途中であっても、現実には、研究・教育は継続して行われており、可能な限り史料は利用できることにしているため、今回のマイクロフィルムの撮影も附属図書館内で行うこととしている。



〈撮影作業の手順〉

- ①書庫内事前調査（史料の数量、保存状況）
- ②『総目録』のデータ入力
- ③データ打ち出し（史料カード作成）
- ④史料の検索及び抽出
- ⑤史料の調達及び撮影前準備（シワ等修復）
- ⑥リール編集（1リール撮影分に編集）
- ⑦撮影（原則として史料は全て撮影する）
- ⑧フィルム現像・アーカイバル処理
- ⑨フィルム検査
- ⑩マスターフィルム仕上
- ⑪第2ネガフィルム作成
- ⑫ポジフィルム作成

〈目録照合整理作業〉

- ①『総目録』データを修正カードに出力
- ②現物及びデュープフィルム等により照合
- ③データの修正、変更、追加
- ④修正データ再入力
- ⑤マイクロ版総目録の作成

〈経費等〉

今回の事業に要する経費は、原則として一切を丸善側で負担することになっている。例えば、撮影等のために使用する部屋の建物使用料、そこで使われる光熱水費、人件費その他撮影作業に必要な諸経費である。しかしながら、史料の中には、経年や利用に伴って生じた損耗や虫食い・水漏れ、綴じが解けているもの等も多く、手を入れなければそのままでは撮影できないものがある。それらの補修に要する経費のほか、綴じの解体の是非の判断や、目録データと現物の照合の監修など専門的判断に関する人的負担などについては、本学で負担せざるをえないものもある。

〈編集等〉

池田家文庫に関しては、附属図書館に置かれている「池田家文庫等特殊文庫委員会」が重要事項を審議することになっており、今回のマイクロ化事業についても、その下に本学の専門教官と図書館員等で構成するワーキンググループを設置し、諸問題に対応すること

になっている。

〈版権料等〉

丸善株式会社では、マイクロフィルムを複製し頒布するわけであるが、その場合、頒布価格の3%を国庫歳入として納入してもらうほか、マスターフィルム及びポジフィルム1セットを本学に無償で提供してもらい、本事業が全て終了したときには、第2ネガフィルムについても本学に提供してもらうことになっている。

5 マイクロ化の意義と今後の課題

今回のマイクロ化によって、内外の多くの研究者等がこの複製されたマイクロフィルムを手もとに備えることができるようになり、わが国における「幕藩体制史の研究が、更に進展する」であろうことは言うまでもないが、一方、諸外国においても日本研究が促進し、歴史的視点を踏まえたわが国の社会・文化といった「日本理解の深化に一層寄与する」のではないかと考える。

しかしながら、今回マイクロ化する池田家文庫や多くの地方史料等は、虫食い等により年々劣化していくものであり、国家的財産であるこれらの史料を後世に伝えていくことは国民全体の課題であり責任である。かけがえない「これらの史料を大事に保存していくために引き続き努力していく」必要がある。

とりわけ本学には地方史料といわれる村方の庶民史料が約8万8千点も収集・整理・保存されている。わが国の近世史の解明に当たって地方史料は、藩政史料を補完する意味で大変史料価値の高いものとされ、本学では『近世庶民史料目録』4巻等を刊行して公開しているが、「これらの史料の保存」も大きな課題として残されている。

最後に、今回のマイクロ化に当たって、文部省をはじめ、本学の事務局並びに関係者の方々には暖かいご理解とご援助をいただき、心からお礼申し上げる次第である。

（いわもと・ただゆき 附属図書館事務部長）



電子メディアと図書館サービス

— ストックからフローへ —

田村 潤 二

はじめに

この5月から6月にかけて、中央図書館では新しい企画によるオリエンテーションを実施した。当初は新入生を対象とし、期間を限った企画であったが、その後、希望もあって申込があれば新入生に限らずゼミ等のまとまった単位でも随時受け付けるとしたところ、3年生、4年生の申込がかなりあり、好評をいただいた。

好評の理由が、オンライン・データベースやCD-ROMという、電子メディアによる文献情報検索を中心としたその内容にあったことは、担当者の実感からしても、受講者アンケートの結果からみても間違いない。

中央図書館では、昨年後半から岡山大学オンライン利用者目録、学術情報システムの全国オンライン目録、CD-ROM 文献情報データベースといった電子メディアによる情報提供サービスを模索しており、これまでのようなカード目録中心のレファレンスサービスからの脱皮を図ってきたところであった。

受講者は、直接オンライン端末やパソコンを操作してオンライン・データベースやCD-ROMを検索し、容易かつスピーディで網羅性に富むその便利さに素直に喜んでくれた。

端末操作等に対するアレルギーというものはあまり感じられず、旺盛な好奇心に溢れていたし、検索方法やオンライン・データベース、CD-ROMソフトの内容についての真摯な質問が多かった。

それだけに、現時点で用意されている情報源等の限界、例えば本学オンライン目録のデータ量の少なさ等を知った時には、失望の色を隠さず、担当者を少なからずあわてさせ、こ

の面での今後の課題の大きさをも考えさせた。

なお、ゼミ単位の受講の場合、教官が授業の一環として参加させた事例や、教官自身も学生と一緒に説明を受ける等の事例もあり、関心の高さは学生だけではないことを示した。

機は熟しているようだ。今回のオリエンテーションで得られた感触は、印刷メディア主体の情報提供サービスから、電子メディアを取り入れた新しい情報提供サービスの展望を持つことが急務であると感じさせた。

電子メディアの様相

オンライン・データベース等の電子メディアがわが国の大学図書館にインパクトを与え出したのは、わずか10数年前のことにすぎない。

最初は、アメリカの商用データベース・サービスの導入という形で幕が開いたのであるが、その当時は、データベースの種類もデータ量も限られたものであった。しかし、その後の欧米や日本を中心とした社会全般にわたる情報の電子化の中で、学術情報の電子化はさらに急速に進んでいる。現在、大規模な目録、抄録、索引等の文献情報はほとんどがデータベースとなりつつあり、各種ファクト・データベース、さらには学術雑誌論文等の原文情報、テキスト情報のデータベースも急速に増えつつある。

これら電子化された学術情報は、主としてオンライン・データベースとして利用されてきたが、最近ではCD-ROM等パッケージ型データベースの普及も急速である。

以上のような情報流通の流れの中、大学図書館はその都度大きなインパクトを受けてきたが、その流れには3つの大きな波があった。

(商用データベース・サービス)

最初は、1970年代後半から始まった DI-ALOG (ダイアログ：アメリカ DIALOG社) や JOIS (ジョイス：日本科学技術情報センター) 等の商用データベース・サービスの導入である。

アメリカでは、すでに1970年代前半から、主として科学分野の文献情報データベースを中心としたサービスが急速に成長しており、DIALOG はその中でも代表的なものであった。また、JOIS は、1970年代後半に作成され始めた日本語文献の書誌データベース・サービスを提供するものである。

主としてオンラインによって提供されるこのサービスは、従来からの印刷メディアによる検索に比べ、即時性や網羅性において優れていたため、わが国でも急速に普及することとなった。

「データベース白書」で見ると、1988年に国内で流通した商用データベースの数は、1982年の約5倍、2,858に達していて、その伸びは目覚ましい。ちなみに、アメリカにおける流通数は約3,700である。

また、データベースの内容も多様化してきている。当初、文献情報中心であったものが現在では科学データやビジネス・データ等のファクト・データベースが半分を越えるようになってきている。また、学術雑誌論文等の原文情報データベースも増え、オンライン電送による原文自体の配送が実用化してきている。

以上のような商用データベース・サービスは、大学図書館のサービスの中で、すでに欠くことのできないものとなっている。

岡山大学でも、鹿田分館では1979年から、中央館では1980年から導入しており、現在では年間800件程度の利用がある。

(インハウス・データベース)

次は、1980年代半ばに入って本格化した各大学図書館のコンピュータ化によってもたらされた目録情報というインハウス・データベースである。

ここでいうコンピュータ化の多くは、後述する「学術情報システム」というネットワーク形成の文脈の中で推進されているもので、それ以前の、個々に孤立した、内部的な事務処理システムとは全く様相が異なっている。

その特色は、図書館の中心業務である「目録業務」のコンピュータ処理が実現したことにある。これまで、手作業によっていたカード体や冊子体目録の作成工程を、コンピュータ処理によるデータベース形成に転換し、このデータベースをもって、これまでよりもずっと便利な、ユーザのためのオンライン検索システムを実現することになったのである。

つまり大学図書館は、自分の足元のデータを迅速に組織し、より便利な、効果的な検索方法をユーザに提供することを可能にしたわけであり、画期的なことであった。

本学の場合も、1987年に専用コンピュータを導入し、システム開発を行ってきたところすでに、目標であったオンライン検索システムを稼働させている。いまのところ、図書館備付けの端末でしか見ることはできないが、近いうちには、総合情報処理センターのマシン上で、全学のユーザからアクセスすることが可能なオンライン利用者目録が実現するはずである。

さて、大学全体から見れば、図書館の目録情報だけがインハウス・データベースではない。教育、研究の中で作成される大小の学術情報データベースが大型計算機センター、情報処理センターあるいは個々の研究室のパソコン等の中に存在するはずである。今後これらのインハウス・データベースは、より一層大学全体の情報システムの中で組織化され、図書館の目録情報とともに全学的に利用されるようになるだろう。

また、これら個別のインハウス・データベースは、高速デジタル回線を基盤とした「学術情報システム」によって全国的に利用されるようになるだろう。このシステムは学術情



報センターを中心として、各大学(図書館・大計センター・情報処理センター等)や国立共同機関等を結ぶ一大情報ネットワークである。中核となる学術情報センターは、全国総合目録情報データベースや同センター自身が作成する各種データベース、その他の外部で作成された各種データベース、合わせて26種、データ量にして1,800万件を蓄積し(平成2年4月)、全国の研究者にサービスを行なっているが、これに合わせて各大学個別のインハウス・データベースも利用できるようなれば、システムの価値はますます高くなるだろう。

(CD-ROM)

最近の CD-ROM の出現も大学図書館に強烈なインパクトを与えている。

コンパクトであると同時に540メガバイトという記録容量があるこのメディアは、文字だけでなく画像や音声も記録できるというマルチメディアである。当初は、文献情報オンライン・データベースの代替物として登場したが、最近ではマルチメディアの特色を活かし、辞書や事典等の参考図書(レファレンス・ブック)の出版も増えている。

CD-ROM は、オンライン・データベースに比べ収録データ量に限界はあるが、①扱い方や操作が極めて簡便であり、利用者が直接利用できるのも、商用データベース・サービスのように図書館職員の代行検索に頼らずにすむ、②無料であるため誰でも心置きなく利用できる、という理由でその人気は高い。特に、MEDLINE 等医学情報データベースの利用が多い医学図書館では、CD-ROM による代替が進み、商用データベース・サービスの利用件数が急速に減少していることが報告されている。

今後、CD-ROM は、先に述べた辞典、辞書、ダイレクトリー、統計等の参考図書の他に、法令、判例、学術雑誌論文等の原文情報のメディアとしても、その重要性を増すことになるだろう。

また、もっと大容量な光ディスクの利用方法についても、現在、学術情報システムの中で研究が進んでいる。単なる事務文書ファイルとしての使い方ではなく、原文情報等イメージ情報の強力なサーバとして、ファクシミリ・ネットワーク等の通信サービスに乗ることができれば、文献供給の新しい展望が開かれることになるだろう。

情報提供サービスの在り方

大学及び大学図書館をめぐる情報流通の様相は以上のようなものである。そこでは情報量の増加とその電子化、多様化という点において急速であるため、ユーザの情報要求もますます高まるとともに、その内容は多様化する。

印刷メディアも、それを扱う図書館活動もなくなるわけではないが、新しい状況のもとでは新しい図書館活動をイメージしておく必要がある。その時の視点は、伝統的なストック中心の視点でなく、ユーザに対する情報提供サービスの視点である。いつまでも旧態依然としているようであれば、かえって図書館が情報流通のネックになってしまう恐れさえある。

まずは、電子メディアや情報機器(オンライン端末、パソコン、CD-ROM 関連機器、光ディスク、ファクシミリ等)の積極的な導入を行う必要がある。及び腰の投資ではユーザを図書館に引きつける魅力とはなり得ない。

同時に、このようなメディアや機器の活用を視点に入れて、情報提供サービスを再構成しなければならない。新しいハードやソフトは、ユーザ自身の情報獲得能力を引き出し、向上させてくれるはずであるので、それに対する支援として、利用指導のあり方が重要になってくると思われる。

冒頭で述べたように、すでに機は熟しており、ユーザは図書館の魅力のある情報提供サービスを待っている。

(たむら・じゅんじ 附属図書館情報サービス課長)



図書館新環境への期待と対応

延 味 能 都

図書館への情報機器の導入を一言であらわそうとすれば、「便利になった」というのが最も簡単な答えであろう。年間に発行される書籍の量は増加する一方であり、私達が文献を探す場合に相手にしなければならないのは世界中で生み出される気の遠くなるような量の書籍の山である。この作業に費やす時間と労力は教官であれ、学生であれ変わることはない。そんな状況が情報機器の利用によって好転しつつある。身近なところでも、本学附属図書館ニュースレター、「ライブラリー・リフレッシュ」をみると、最近は続々とCD-ROMが導入されている。出版されたCD-ROMの書誌ともいべき『CD-ROM総覧』を見れば、すでにかかなりの数のCD-ROMデータベースが記載されている。それほど遠くない将来、あの退屈で暗い作業から全面的に解放される日が来ると考えれば、これは喜び以外のなにものでもない。

しかし、情報機器の導入から無条件に利益が得られる訳ではない。機械化によって「便利になってゆく」ことは私たち利用者に新しい状況への適応を要求するからである。附属図書館では機械の稼働時間も順調に延びていっている様子であり、機械を操る学生の姿も増えてきた。これは利用者が大きな問題もなく新しい環境に適応していることを示していると思われるが、まだ機械検索を利用することに抵抗を感じる人は少なくないようであり新しい環境に必要な知識を得る機会があまりに少ないように思われる。利用者を新しい環境に導く積極的な働きかけが必要になっている。

すでに各種の論文で図書館利用法の組織的

な教育の必要性が指摘されている。たとえば新生生に対してはオリエンテーションの時間があるが、この中に図書館利用案内を組み込むことはできないだろうか。卒論を作成する学生にたいしても同様な時間を設けることができないだろうか。そしてその中で図書館における情報機器の利用法を扱うことができれば、利用者は新しい環境へ入る入口を見いだす機会が得られるだろう。附属図書館では機械検索の利用者に対するセミナーを行っているが、この情報機器利用のセミナーを卒論指導の一環として活用するといったことも可能と思う。こうした時間を利用して、新しい環境に必要な知識を利用者に与えることができるだろう。

書誌やデータベースの構成、得意とする領域、カバーする年代や分野、データベース間でのデータ重複などに関する知識の必要性は印刷媒体の書誌だけの時代にもあった。こうした知識は今まで以上に重要で必要なものになるだろうし、機械の操作法の習得は必要不可欠な要素である。印刷媒体の書誌の場合には、各項目の配列さえ理解すれば最小限とはいえ利用が可能であり、その配列方法は50音順か ALPHABET 配列という、あまりに慣れ親しんでいて忘れることもできないものであった。CD-ROM 検索などの場合にはこれらの配列を念頭に置く必要は全く無い。作家名や著者名がうろ覚えでも機械が何とか助けてくれる。その代わりに機械の立ち上げ方、若干のコマンドなどといった、これまで必要なかったことを覚えなければならないのだが、こうしたコマンドは機械に触れるまでは全く予想もつかないのが普通である。



また、CD-ROM 検索は付属の検索ソフトで行われるが、一般にソフトの利用法には基本的な利用法に加えてさらに高度な利用法があるのが常識である。CD-ROM のデータベースを例にとれば、基本的操作ができる状態とは、若干のコマンドを理解し、曲がりなりに検索が可能な状態と考えることができる。これに対して、検索の結果をプリントアウトする、手持ちのディスクに落として後で自分のワープロ等で加工して独自の書誌を構築するといった段階は、高度な利用が可能な状態ととらえることができるだろう。実は機械検索の恩恵が直接感じられるようになるのはこの段階でだと思うのだが、この基本から応用への移行は一人では達成できない。大体がマニュアルというのは分厚いものであって、読みづらいものと相場がきまっている。しかもマニュアルを読む忍耐を備えていても、図書館のコンピュータを使って図書館のマニュアルを独占して首っ引きで熟練の域に達するわけにはいかない。こうした時にはどうしても他からの助けが必要なのである。

新しい環境に適應して、それを十分に享受するためには、知らなければならないことが結構多いのである。図書館がいっそう便利なものになるために、利用者教育について考え続けてゆくことが不可欠である。

これまで人の問題に関して考えてきたが、CD-ROM にも基本的な問題が無いわけではない。カバー範囲についていえば、CD-ROM のカバーする範囲は今の段階では、永い伝統と膨大な蓄積がある印刷媒体にはとうてい及ばない。人文科学系では、印刷媒体の書誌に依存する部分が圧倒的に大きい。過去のデータの入力、いわゆる遡及入力の遅れが潜在的利用者の機械検索に対する不満となっていることは否定できないだろう。またCD-ROM、これはオンライン検索でも同様だが、人文科学系では雑誌掲載論文をタイトルで検索できないのも不満な部分である。つまり、現在の

CD-ROM のカバー範囲は印刷媒体の書誌のほんの一部でしかないのである。データベースが小さいために生じるこうした不満は、いずれ時間とともに解決されるとしても、最も基本的かつ重要な問題である。さらにもう一つ大きな問題がある。それは検索ソフトの使い方が統一されていないということである。これでは CD-ROM を利用するために覚えることが多くなりすぎる。複数のワープロを利用したことのある人なら、それがどれほど精神的苦痛をとまなうか想像できるだろう。具体的には「全ての」とまでは望まないが、複数の検索ソフトを統合してしまうようなオペレーション・システムの開発が待たれる。この他にも、オンラインでアクセスできない、データが多いと複数の CD-ROM を入れ換えて使用しなければならないといった問題があるが、CD-ROM 検索が今以上に普及していずれ解決されるまで待てる問題である。

これに対して、CD-ROM が与える利点は大きい。印刷媒体を利用した検索に要求された膨大な時間と労力が半減する。情報の更新が印刷媒体に比べて速い。こうした変化は実際に検索してみると、言葉であらわす以上に圧倒的な利点である。私たちは厚く重い書誌を運ぶ肉体的苦痛から解放され、書誌をめくりながらイライラと目を走らせる精神的苦痛に別れを告げることになる。そのかわりにコンピュータの前でチャチャとキーをいじって遊んでいるように見えながらも、過去から現在まで、そして東西を問わずに検索の目を走らせることができるわけだ。こうした環境が一日でも早く達成され、多くの人のものになるためには時間と図書館の努力、そしてなによりも利用者の積極的な姿勢が必要であることはいうまでもない。

ところで、先日のテレビで、岡山大学附属図書館の岡山藩の資料がマイクロ化されることが華々しく報道されたが、非常に興味深いニュースであった。これは図書館が国会図書



館ほどの巨大な組織でなくとも独自の資料の提供者となり得ることを意味し、最近の情報機器の進歩はこの可能性を拡大してくれるように思われたからだ。個々の図書館が提供する独自の資料は、その創造には膨大な手間がかかるとはいえ、最終的には図書館の財産となり、利用者の利益となることはあきらかである。附属図書館の場合は岡山藩の資料という特殊なオリジナル資料が手元にあったわけだが、それ以外にも図書館が独自の資料を創り上げてゆくことは可能であろう。

たとえば、文献検索を行う場所は図書館から研究室や自宅にまで広がって行くだろう。その気になれば、現在でも可能である。その検索の内容もタイトルや所蔵図書館の検索から、目次や、内容へと変化してゆくだろう。ある領域の書籍、ある雑誌の創刊号から最新号までの目次のデータの電子化はフロッピー・ディスクや、CD-ROMで配布可能な、そしてオンラインで全国からアクセス可能な独自の資料の創造を可能にする。

テキストを丸ごと入力すれば、その応用範囲はさらに広がる。この場合は著作権の問題が生じるが、解決不可能ではないと思われる。いくつかの大辞典や辞書はすでにCD-ROM化されており、印刷媒体の時に比較して多くの利点を提供している。テキストの機械可読化に関しては、千葉大文学部哲学研究室に事務局を置くテキスト・データベース研究会 JACH といった研究グループもできている。また、国内外を問わず、文学作品の機械入力随所で進行中である。たとえばシェークスピア全集などはフロッピー・ディスク数枚に収められて日本でも販売されている。フランス語では『フランス語宝典』Trésor de la langue française という巨大な辞書が国家的事業として刊行されつつあるが、この辞書を作成するために膨大な上にも膨大な数の文学作品が丸々コンピュータ入力されている。その結果できた一種のデータベース

は今や国家的財産になっている。そして著作権などの問題のため一般公開には至っていないが、このデータもすでに CD-ROM 化されている。これは当然のことだが世界に一つしかない資料であり、それはテキストの電子化によって創造されたものなのである。

実際、機械可読化された文学作品の利用価値は非常に高い。一例をあげれば、文学作品に関してはコンコーダンスと呼ばれる前後の文脈付き索引がよく作成されるが、そのためには OCP (オックスフォード・コンコーダンス・プログラム) というプログラムがよく利用される。このプログラムは当初は大型計算機でしか作動しなかったが、現在ではパソコン上でも動くようになり、コンコーダンスの作成は現在ほとんど機械処理である。そしてこのプログラムを利用するには、テキストが機械可読化されていることが大前提なのである。こうした観点からみると、情報機器の発達には本に関わるあらゆる情報の電子化の可能性をもたらし、図書館はそれをなし得る最も近い場所にある組織である。

最近では OCR (文字光学読み取り装置) が次第に高性能になり、価格が下がって来ているため、この傾向には一層拍車がかかるだろう。とはいえ機械の普及率はまだ低い。しかも 100% の読み取り率ではないから、最後は人海戦術である。こうした仕事は長年にわたって確실히行われてゆくためには、それは組織による仕事でなければならない。

したがって、今後は研究者、あるいは複数の図書館、情報処理センターなどが共同で仕事を進めて行くことにより新たな役割を見いだす可能性は高く、独自の新しい資料を生み出してゆく可能性が以前にもまして大きくなったと考えるのである。そして私たち利用者はその恩恵を一日でも早く図書館から引き出したいと願っている。

(えんみ・よしと 文学部講師)



池田家文庫データベースの作成

— 情報の再組織化・高度化 —

倉地 克直

1 保存と提供

岡山大学附属図書館には、岡山藩政史料を中心にした池田家文庫や岡山県下の大庄屋・庄屋家の文書などの近世庶民史料が、多数所蔵されている。これらの史料の保存と公開には、多くの労力と費用が必要であるが、にもかかわらず、それを実現し、今日まで続けて来られた関係者の方々の見識と努力とに、敬意を表したいと思う。

これらの史料は、大学での日々の教育活動に利用されるとともに、県内はもとより全国の研究者や一般の人々に広く利用されておりその利用者数は年間延約1,000人にのぼることである。本来、大学は、地域に開かれた教育・研究の機関であり、地域の文化的個性を全国に発信する場であると考え、岡山大学がそうした機能を果たす上で、池田家文庫をはじめとした文書史料群は、重要な役割を担っていると考えるだろう。

先日マスコミで大きく報道されたように、今度、池田家文庫のうち約6万点余の岡山藩政史料が全てマイクロ化されることになり、既に作業が始められた。この事業が、史料の保存と公開という点で画期的な意義を持つものであることは、言うまでもないことであろう。もちろん、これによって、原史料所蔵館としての保存と公開の役割がなくなるわけではないが、直接岡山大学附属図書館まで足を運ばなくても史料の利用が可能になるわけだから、少なくともその分だけは公開面での負担は減少するだろう。

とすれば、原史料所蔵者としての館の役割も、当然変化していくはずである。つまり、単純な情報の提供（史料の公開）だけではな

く、情報を再組織してより高度なものとして提供する役割が、期待されるようになって思う。もちろん、これは池田家文庫の藩政史料に限ったことで、図書館には他に近世庶民史料も多数所蔵されており、これらについては引き続き、これまでと同様の保存と公開の努力が必要である。

古文書史料の情報源として基本的なものは「文書目録」である。池田家文庫についても約1,200頁のりっぱな『総目録』が刊行されている。普通私たちは、この目録によって適当な史料を選定し、それを通覧することによって必要な事実を探り出すという作業を行っている。今回のマイクロ化の作業と並行してこの『総目録』の改定・補充が行われ、あわせて目録全体の電子化が行われることになっている。これによって、目録情報を多角的に操作し使用することが可能となるが、私たちとしては、より情報を高度化するために、史料に含まれた事実へ直接アクセスし、そこから必要な史料を選定できるよう、情報を再組織して提供する新しいシステムを構築する必要があると考えている。

2 データベースの作成

一概に藩政史料といっても、その内容は多種多様であり、これらの史料を一括して一挙に再組織することは全く不可能である。藩政史料のうち、藩政全体を理解する上で必要不可欠であるとともに、コンピューター処理による再組織化に適する史料群としては、家臣団についてのものをまずあげることができる。岡山藩の家臣は約5,000人を数えるが、これらの人物の情報源となる史料群としては、次

のようなものがあげられる。

- (1) 侍帳 寛永9～明治2年
切米帳 延宝元～明治3年
- (2) 奉公書
 - ① 奉公書 3,051冊
 - ② 除帳 285冊
- (3) 藩庁編纂史料
 - ① 先祖書上 寛永21年 2冊 532家
 - ② 家中諸士家譜五音寄 寛文9年 17冊
 - ③ 諸職交替 7点12冊

このうち、(3)-③の「諸職交替」のデータベースが、附属図書館によって、総合情報処理センターの ACOS-6 システム上に構築され、1988年12月にオンライン検索システムとして学内に公開された。このデータベースは全国的に初めての試みとして注目を集めている。

「諸職交替」というのは、岡山藩が編纂した中上級家臣の役職別更迭記録である。この史料は、ある人物の役職名やその在任期間などを調べるために、よく利用される基本史料である。ところが、これは役職別になっているために、人物名からその役職を割り出すためには、最初からページを繰っていかねばならなかった。しかし、今回のデータベース化によって、たちどころにその情報を得ることができるようになった。しかも、データベース化によって、単なる検索だけではなく例えば、役職と知行高・家格などとの相関といった、より研究的なテーマについてもデータを提供できるようになった。

「諸職交替」のデータは、75職種6,175件にのぼるが、それはもともと限られたものであった。つまり、1つは、それらが岡山藩家臣(約5,000人)のうち「平士」以上(約1,000人)に関するものにすぎず、2つには、あくまでも職種を中心とするものであって、人物はもとより家や家臣団の情報としても不十分なものだからである。そこで私たちは、家臣に関する史料としては最も基礎的かつ網

羅的なものである(2)「奉公書」(約3,400冊)に取り組む必要があると考えた。「奉公書」データベース作成の作業は、1989年・90年の2年間にわたって、福武学術文化振興財団からの研究助成金を得て、基礎的な研究を行っている。この研究は、歴史研究者・情報科学研究者・図書館専門職員という三者の協力の下に進められており、学内における学際的な共同研究および研究活動とサービス業務との結合という点でも重要な意味を持っていると思う。

3 一次情報へのフィードバック

ところで、人文科学系の研究者は、職人的な研究スタイルをとることが多く、私を含めて機械的なデータ処理については保守的な傾向が強い。人間の行為や意識の軌跡を対象とする学問の性格からして、それは当然であるとも言える。家臣の履歴書集成ともいべき「奉公書」などは、機械的な処理に比較的なじみやすい方だと思うが、それでも同様の危険が付きまとう。そもそも、データ入力 과정에서、データ作成者の主観的な判断が働く可能性が高いし、また、データの機械可読化の過程で、原史料の持つ微妙なニュアンスが消えてしまう恐れも多い。

これらの危険を避けるためには、徹底的な史料研究と正式な入力までの試行(シミュレーション)が不可欠であるが、それでもその努力には限界があると考える。そのため、再組織化された情報(データベース)から一次的な情報(原史料)にフィードバックできる回路をシステムとして整備しておく必要がある。私たちの研究では、史料の原形を画像データとして入力する画像データバンクシステムとの結合を考えているが、今回のマイクロ化の作業が完成すれば、一次情報へフィードバックするための有効なツールになると期待している。

(くらし・かつなお 文学部助教授)





インドネシアとの 国際交流について

岩 間 泉

1 初めての博士論文

岡山大学に自然科学研究科（大学院後期博士課程）が設立された年に、フィッキー・パネレウェン君（インドネシア国サムラチャランギ大学助教授）が博士課程に進んで来た。

初めての博士論文の指導について、発展途上国の研究指導に経験が深いU教授の助言は『日本で纏めた体系がインドネシアでスムーズに役に立ち、さらに発展させうること』であった。

私は、インドネシアと日本を包み、モンスーンアジア地域とし、この地域の先進国として日本を位置づけ、日本の近代化過程のモンスーンアジア的固有の性格を体系的に解明することを骨子とする学位論文構想を作り、これによってフィッキー君を指導した。

具体的テーマは『日本の近代化に対応する草地の再編過程に関する研究』とした。

モンスーンアジア地域は、「夏湿帯」で「林地適地」であるから、この地域の草地は、「夏乾帯」で「草地適地」のヨーロッパの草地とは性格が異なる。ヨーロッパの草地は刈り取り・放牧を中心に、個人で制御できるが、モンスーンアジアの草地は、その維持のために火入を必要とし、このため、草地の利用維持は、集団制御にならざるを得ない。

この歴史的事実として、日本の近代化過程に伴う草地再編のあり方を、明治期の帝国議会の資料などから示した。そこでは、共有草地をめぐる国有地入会権が、法律的には否認されながら、具体的には容認されざるを得なかった過程が示されている。

今後のインドネシア草地畜産の推進のために、その基盤になる草地の固有の性格の解明

が進むことを期待している。

2 「水田」と「プカランガン」

インドネシアから二人目の博士課程の学生ストリスノ・イワントノ君（インドネシア共和国協同組合省課長）は、修士課程より研究室に来て在日5年に及び、来年3月に博士課程を終わり帰国予定である。

同君は中央政府の若い行政官として、インドネシアにおける協同組合の農民組織率が20%にしか過ぎず、日本が100%であることに着目し、日本が近代化過程の中で、農協の農民組織率を向上させてきた経験を体系化し、学位論文としてきている。

具体的テーマとしては『日本の近代化に対応する農業協同組合の展開過程に関する研究』とし、モンスーンアジア地域の固有の性格、農業構造を把握し、これに適正に対応していった日本の農協の組織方針の特質を、歴史的・体系的に解明してきている。

同君が行政官で、インドネシアへの学位論文構想の具体的な適応に関心が強いことから、論文構想としてモンスーンアジア地域の北限にある日本と、南限にあるインドネシアの違いにも注目してきている。

日本の農協の農民組織率の高さは、農協が農民の基本構造を把握し、これと適正に対応する組織方針を作り上げてきたからである。すなわち、全農民は集落に依存し、水田を中心に営農を行っている。この営農体制を支援する農協の組織方針が一貫していて、組織率を向上させてきている。

インドネシアの場合、協同組合は地域総合協同組合として、日本の総合農協と同質の集



団を基盤とする組織方針を作り上げてきているにもかかわらず、その農民組織率は低い。このことをめぐり、私は研究室のスタッフやイワントノ君と議論を重ねていった。

議論の過程で、日本ではすべての農民が集落・水田とかかわるが、インドネシアでは、すべての農民は集落とはかかわるが、水田とはかかわらないことが明らかになった。

水田を保有する農民（小作・自作）は、全農民の40%、畑を保有する農民は60%である。インドネシアでは、水田も畑も全農民がかかわるものではなく、100%の農民がかかわるのは「プカランガン」であるというのが、イワントノ君の基本認識であった。

インドネシアでは40%の農民しか水田にかかわっていないとすると、日本の農協の水田中心の組織方針は、インドネシアの規範としてはそのままでは十分でありえない。日本の水田に匹敵する地目を基盤とする対応が求められる。

農民の100%がかかわる地目はインドネシアの場合、水田でも畑でもなく、固有の地目「プカランガン」である。従って、この「プカランガン」の構造を体系的に把握し、これを基軸に地域農業構造を全体として発展させることができないのか？という見解が研究室で主張されるに至った。

「プカランガン」は日本語では「屋敷地」になり、英訳では「Home Garden」になる。しかしインドネシアの実態は、この訳では対応できていないと思われる。「プカランガン」は、インドネシアのジャワ島を中心に、18世紀頃より一般に普及した固有の土地利用型の地目であり、畑地を転換して作っている。平均10a程度の面積で、中に屋敷（住居）があり、原型としては一番外側にココナツ樹を植え、その内側にバナナ樹を植え、一番内側にイモ類（キャッサバなど）を栽培している。若干の家畜をこの中で飼う。

この特色は、有用な木本の喬木、低木を人

為的に屋敷の周囲に配置し、この中に熱帯に適した根菜を導入し、生態的に安定した人為的極相空間を作り、熱帯の強烈な日射を制御し、人間にも家畜にも適合した生活、生産空間を作りだしてきているところにある。オーストラリアのベニー教授らは、「プカランガン」の農家経済に対する寄与率を49%と評価している。

現在、イワントノ君は一時帰国して、「プカランガン」の調査をジャワ島の典型的地域を中心に行っている。協同組合省からは学位論文構想に対する関心と、モンスーンアジア南限にあるインドネシアの固有の性格について、共同して基本的知見の拡充を図りたいとの意向が研究室に示されてきている。

私は、他の分野の専門家とも協力して「プカランガン」をめぐる基本的知見の拡充に努める所存である。

3 インドネシアの Green Revolution

ところで、イワントノ君を介して、来日の機会に親しく議論した共同組合省のアルフィン大臣やナスティオン長官などの中樞は、インドネシア近代化の固有の道を、真剣に求めていることをひしひしと私に感じさせた。

このことを背景に、イワントノ君との議論は常に具体的構想を伴って展開することとなった。そのためには議論の無意識の前提になる社会慣行の日本との違いまで明確に把握せねばならなかった。

農家の農地相続は、日本では近世より現在まで、実態としては家督相続主体である。

しかしながらインドネシアの農地相続は、伝統的に均分相続であり、畑地を「プカランガン」に転換し、子供たちに与えることがその主要内容をなしている。この「プカランガン」の革新は、インドネシア固有の土地生産力を向上させる Green Revolution になると思える。

（いわま・いずみ 農学部教授）



コンバージョンセンター オープンにあたって

岡本昌也

このたび、図書館3階の演習室に「池田家文庫マイクロ化コンバージョンセンター」を開所させていただき、マイクロ化プロジェクトをスタートすることになりました。今後、3年間にわたって、全学の皆さんにはご不便をおかけすることになりますが、よろしくご理解を賜りたいと思います。

さて、プロジェクトのスタートに際して、これから3年間、実務にあたるプロジェクトチーム全員の気持ちをお伝えさせていただきたいと思います。

われわれ「池田家文庫マイクロ化コンバージョンセンター」のメンバー構成は混成チームです。岡山、広島、東京の人、そしてサービ斯拉ボ、メーカーとさまざまです。しかし今回のメンバーで共通していることは、今まで、数多くの文書、資料のマイクロ化プロジェクトおよびマイクロ出版業務に携わってきた、地元ならびに日本を代表するプロフェッショナル軍団ということです。

われわれは、長年にわたる多くの経験を通していろいろなことを学び、またそれらを糧として常に新しい仕事へ反映してまいりました。今回、特に強調したいことは、古文書・記録類のマイクロ変換業務を通じ、一般のマイクロフィルミングとは違う、多くの異質のノウハウを習得してきたことです。

その中で最も重要な教示のひとつは、原本の保全の意義を強く認識させられたことです。今回、われわれに課せられた責務は単にマイクロフィルムに変換すればこと足りることではありません。原本の保全を必須条件に実作業を展開しなければならないことです。

特に、古文書・記録類のマイクロ化は、虫食い、変色等の経年変化が相当進んでいるため、原本の取り扱いには精緻を極めた手法の採用が必定です。

そのため約1年間にわたり、館側の関係者との間で、収録スペックの協議、作業システムフローの設計、また作業精度の維持を実現するための各種マニュアル作り等の諸準備を積み重ねてまいりました。また学術的な助言をお願いする先生方、補助業務として連携をお願いしている表装会社、ソフト会社等の人達とのタイアップも大切な課題です。

そのような意味で、マイクロフィルミングは、マイクロ業界に関係している私たちだけで、遂行できる仕事ではありません。まさに学術的、業際的な協力関係をベースに、ハード、ソフト、サービスを組み合わせたトータルシステムの構築により初めて実現できる事業と認識しています。

われわれ一同は、わが国の古文書・記録類のマイクロ化では最大規模のこの事業に参画できることを名誉と思い、「後世に評価される納得のいく仕事をしたい！」また「従事者全員で誇りと自信を勝ち取ろう！」をスローガンに、3年の歳月をかけて事業の完遂を目指す覚悟です。

備前焼きは、「料理を引き立たせ、料理にも負けない器」として有名です。私たちは「料理」を「夢とロマン」に「器」を「プロジェクトチーム」に置き換え、「過去の遺産を未来に継承する」この文化事業に全力投球する所存です。

(おかもと・まさや プロジェクト・リーダー)

マスカット

業務を再構成し係名を変更

学術情報システムの進展に伴い、時代の変化に即応した機能的な業務遂行を図るため、平成2年度から図書館事務分掌規程が一部改正され、次のような係構成になりました。

本館

情報管理課

総務係

資料受入係 (旧称 収書係)

目録情報係 (旧称 目録係)

システム管理係 (旧称 学術情報係)

情報サービス課

資料運用係 (旧称 運用係)

雑誌係

参考調査係

相互利用係 (旧称 相互協力係)

鹿田分館

受入係

目録情報係 (旧称 整理係)

閲覧係

参考調査係

資源生物学研究所分館

受入係 (旧称 整理係)

閲覧係

附属図書館広報委員会発足

図書館の広報活動は、教職員・学生・学外利用者に対し、図書館の活動方針、サービス内容、国内外の図書館界の動向等をお知らせし、図書館の利用及び業務の円滑化を図るため行うものです。従来、当館では館報編集委員会が組織されていましたが、昨年度、広報活動の見直しが行われ、発行責任者、発行目

的、発行対象を明確にし、編集委員会の位置付けをして、館報、概要、利用案内とも、内容を刷新しました。この経過を踏まえて、今年度は新たに附属図書館広報委員会が設けられ、次のとおり活動することになりました。

委員会の所掌する事項

- 1 中央図書館における広報の企画
- 2 「岡山大学附属図書館概要」の編集・発行
- 3 「楳」の編集・発行
- 4 「中央図書館利用案内」の編集・発行
- 5 「ライブラリー・リフレッシュ」の編集・発行
- 6 その他、中央図書館における広報に関すること

委員会のメンバー

- 1 情報サービス課長
- 2 参考調査係長
- 3 参考調査係員
- 4 情報管理課長推薦の同課職員2名
- 5 情報サービス課長推薦の同課職員1名
- 6 分館職員各1名

なお、平成2年4月1日付け、図書館事務分掌規程の改正により、図書館広報に関する業務は、参考調査係の担当になりました。

ライブラリー・リフレッシュ 図書館新情報紙に変身

これまで電算化システムの概要をお知らせしてきた「ライブラリー・リフレッシュ」が、今年4月(No.6)から、図書館の企画やサービスに関する情報をお知らせするニュース紙に変身しました。ワープロタイプ、B5ないしB4判1枚の謄写刷り速報紙として活躍しています。ご要望やお問い合わせは参考調査係(内線844)まで。

CD-ROM を設置

図書館報「楳」No. 9で特集(LAN OPACニューメディア)しましたが、当館でも電子図書館システムの一環として、この度CD-ROMの導入を図り、パソコン(NEC PC-98、ソニークォーターL)と次のような国内外ソフトを整備し、専用コーナーを設けました。専門のインストラクターによる利用説明会、オリエンテーション、カウンターサービスなどをとおして、ユーザ・インストラクションに努めています。

●国内ソフト

J-BISC 国立国会図書館書誌情報
遡及版 (1969.1~1983.12)
カレント版 (1984.1~)
CD-HIASK 朝日新聞記事情報
(1986~1989年、年ごと)
その他、電子広辞苑、CD-BOOK、CD-
人物情報、Nacsis-CD: Serials、模範六法、
CD-Word 12+1など。

●海外ソフト

MEDLINE 医学・生医学文献情報
(1988~)
Current Contents on Diskette
Life Sciences J-1200
Agriculture, Bio. & Environ. Sciences
Physical, Chemical & Earth Sciences
(1990.8.13~)
Books in Print PLUS 米国既刊・新刊本情報
Ulrich's PLUS 雑誌の出版情報
(いずれも1990~)
フランス・西ドイツの全国書誌情報の
CD-ROMも年内に収集の予定です。

●CD-ROM コーナー

図書館2階レファレンスコーナー

●利用時間

月曜日~金曜日 9:30~16:30
土曜日 9:30~12:00

●検索マニュアル 本体協に配置しています。

'90オリエンテーション

ニューメディアによる文献探索

今年度の中央図書館オリエンテーションは初の試みとして、ニューメディアによる文献探索を企画しました。新入生をはじめ広く学内の学生を対象に、参考調査係を中心にプロジェクトチームを組み、5月の毎週水曜日の午後1時から、実施しました。

OPAC(オンライン目録)による本学蔵書の探し方に重点をおき、マンツーマン方式で端末実習を行い好評でした。カード目録の見方や印刷体二次資料についても説明しました。

ニューメディア CD-ROM の利用は、J-BISC による図書の基本的な調べ方にポイントをおき、実地操作を予定しましたが、時間的な制約から図書館員のデモンストレーション中心となり、HIASK や広辞苑に人気が集まりました。今後の工夫が必要です。

NACISIS-CAT は学術情報システムの紹介がねらいでしたが、論文作成にとりかかる高学年から、大きな反響がありました。

短期間に延150人の参加があり、その後も夏期休暇前までに、教官参加のゼミ単位でのグループの申し込みなど、6グループ42人の参加がありました。

参加者からは、図書館での効率的な図書の探し方が分かり来館しやすくなった、探し方が便利になり卒論作成にもどしどし利用したい等の積極的な意見が寄せられましたが、さらに利用者の多様な注文に対応できるプログラムの開拓が必要です。

池田家文庫マイクロ化事業企画発表会

このたび図書館では、丸善株式会社の協力により、当館が所蔵する「池田家文庫」のマイクロ化事業に着手しました。重要文化財「信長記」を含む貴重な学術資料を、将来にわたる保存対策と国内外の研究者に広く利用

の機会を提供するために計画されたものです。

8月30日午前10時から企画発表会が持たれ附属図書館3階閲覧室で、高橋学長、定兼附属図書館長、馬上事務局長らが、海老原丸善社長、大西富士写真フィルム社長とともに、記者会見を行いました。引き続き3階演習室に設けられたコンバージョンセンターにおいて、テープカット、学長がスタートボタンのシャッターを押して、事業が開始されました。午後5時半から、岡山国際ホテルにおいて、文部省の緒方学術情報課長、谷口名誉教授らを迎え、学内外の招待者約百人の出席のもとにレセプションが開催されました。なおこの事業については、マスコミ報道機関などで全国的に紹介されました。

池田家文庫藩政史料の一時利用制限

今回の撮影対象は藩政史料（古文書・記録類）約6万点で、4期に分け、平成2年9月から3カ年の予定で順次撮影をします。この期間、補修や、撮影中の史料は利用を停止し

ます。利用を希望される場合は、参考調査係にあらかじめお問い合わせのうえ来館してください。和漢典籍及び地方史料については従来どおり利用できます。

なお、このことについては、全国の大学図書館、県内の関連諸機関にマイクロ化事業概要の案内とともにお知らせしました。また、図書館協力ニュースに掲載される予定です。

鹿田分館でも、カードレスに

鹿田分館でも、平成2年度整理分から、目録作成業務の電算化を開始しました。それに伴い、カード目録の作成・編成も平成元年度分までで凍結し、カードレス体制へ移行しました。但し、分館には、今のところ、検索用端末がないため、蔵書リスト（書名順：和洋別）を3カ月ごとに出力して、1階閲覧室のカードボックス上に置くことにしました。また、従来図書カードを配布していた歯学部・医療短期大学部には、蔵書リスト（購入者名順：該当部局のみ）を送付しています。

会議

◆ 学 外

- 4.18~4.19 中国四国地区大学図書館協議会総会
（於高知大学）
- 4.19 国立大学図書館協議会総会（於高知大学）
 - ・会計実地検査について
 - ・OPACの利用促進について
 - ・係長会のあり方について
 - ・図書館職員の確保について
 - ・ニューメディアによるサービス機能の向上について
- 5. 4 国立大学附属図書館事務部課長会議
（於東京医科歯科大学）
 - ・学術行政の当面する諸問題について
 - ・大学図書館の当面する諸問題について
 - ・パネルディスカッション「大学図書館間複写サービスシステムの改善方策について」

- 5.18 岡山県図書館協会第1回理事会
（於岡山県総合文化センター）
- 6. 4 岡山県図書館協会定期総会
（於岡山県総合文化センター）
- 6. 5 国立大学図書館協議会受賞者選考委員会
（於東京大学）
- 6. 6 国立大学図書館協議会理事会（於東京大学）
 - ・国立大学図書館協議会受賞候補者について
 - ・国立大学図書館と大学共同利用機関等との相互利用実施要項（案）について
- 6.28~6.29 国立大学図書館協議会総会
（於熊本大学）
 - ・週40時間勤務制試行と利用者サービスのあり方について
 - ・資料保存（酸性紙について）



- ・学術情報ネットワークの整備促進について
- ・ニューメディア予算について
- ・図書館建築基準の見直しについて
- ・研究集会「大学図書館とニューメディア
— CD-ROM を中心に—」

7.31 岡山県図書館協会第2回理事会
(於岡山県総合文化センター)

◆ 学 内

- 3.9 新中央図書館建設企画委員会専門委員会
・新中央図書館建設について
- 4.27 第1回附属図書館運営委員会
・附属図書館各種小委員会への所属について
・図書館資料整備5カ年計画について
・その他
- 5.10 平成2年度図書資料(大型コレクション)
収書計画委員会
- 5.17 池田家文庫等特殊文庫委員会
・池田家文庫のマイクロ化について、その他
- 5.18 第2回附属図書館運営委員会
・図書館資料整備5カ年計画(案)について
・平成2年度図書館資料購入費暫定予算配
分(案)について、その他

- 7.8 第1回附属図書館広報委員会
・附属図書館広報委員会の設置について
・平成2年度の活動方針について
・館報「楳」No12の編集について

- 7.12 第3回附属図書館運営委員会
・図書館資料購入費の配分方針について
・その他

- 7.19 第1回附属図書館資料選択委員会
・本年度の図書館資料選択方針について

- 9.21 図書館データベースに関する総合情報処理
センター長・附属図書館長協議会

- 9.26 第1回池田家文庫藩政史料マイクロ化実務
打合わせ会
・作業マニュアルについて
・目録照合作業について、その他

- 9.27 第2回附属図書館資料選択委員会

- 10.2 第2回附属図書館広報委員会

- 10.12 平成2年度特別図書選定小委員会
平成2年度附属図書館中央館備付「全学共
用図書」(人文・社会科学系)選定小委員会
平成2年度附属図書館中央館備付「全学共
用図書」(自然科学系)選定小委員会

研修

- ・文科系の化学物質辞書セミナー(5.30~5.31)
参加者 中野美智子

- ・オンライン DIALOG 化学物質辞書・化学物質
セミナー(7.17~7.18) 参加者 小林雅代

編集委から

池田家文庫マイクロ化がスタートしました。マスコミの報道もあり、はなばなしくスタートできたことは幸せでしたが、本番は、これからです。

長期にわたる、地道で骨の折れる作業が続きますが、やがて、本学ならではのオリジナリティーのある情報が、新しい形のもとに世界に届けられる日を楽しみにしたいと思います。

さて、広報委員会のもとで、最初の号をお届けすることになりました。とはいえ、編集にあたっての

考え方は昨年の第9号以来、変わっていません。図書館の置かれている状況を正しくお伝えし、進むべき道を議論していただくため、テーマを選び特集体制を維持する所存です。本号も、メディア多様化時代における図書館サービスの在り方について、先生方のご寄稿をいただき、特集を組みました。

大学の教育・研究に責任ある先生方の意見が積極的に表明されることに、図書館改善の希望を託しています。(広報委員長 田村)

岡山大学附属図書館報「楳」 No.12 平成2年10月29日
発行人 岩元忠幸 広報委員会 委員長 田村 委員 岡、中野、三棹、川上、井ノ上、竹久、青井
岡山大学附属図書館発行 〒700 岡山市津島中3丁目1-1 電話0862-52-1111